「知床とヒグマと人間」

北海道斜里高等学校　１年　　堤　　椿

「もし、自分たちの知床を象徴する存在が明日からいなくなったら、みなさんはどう感じますか。」そう問いかけられたとき、寂しいと思う人もいれば、安心する人もいるでしょう。

では、知床を象徴する存在とは何でしょうか。私はヒグマだと考えます。そう考えるようになったきっかけは、港で一頭の子グマを見たことでした。その子はとても落ち着かない様子で辺りを往復し、何かを探しているように見えました。通常、子グマは母グマと一緒に行動しますが、周囲に母親の姿はありませんでした。本当の理由は分かりませんが、「もしかしたら母グマは駆除されてしまったのだろうか」と考えました。その瞬間、それまでニュースの中の出来事だったヒグマの駆除が、一気に自分にとって身近な問題として感じられたのです。

ニュースではよく「ヒグマ一頭を駆除」と短く伝えられます。しかし、この報道だけで私たちは本当に、ヒグマとの住み分けや適切な距離感について理解できているのだろうかと疑問に思いました。

近年、ヒグマによる農作物の被害や人身事故が増加し、多くの人が不安を抱えています。二〇二四年に行われた北海道の調査では、ヒグマに対して「大きく不安が増えた」「不安が増えた」と答えた人は合わせて七二．六％にのぼりました。また、ヒグマの捕獲を積極的に行うべきだと考える人も増えています。昨年は羅臼岳で登山者がヒグマに襲われる事故がありました。人の命を守るための手段として、ヒグマを駆除することはあります。この一方で、ヒグマとの共存が難しい課題になっていると感じます。

では、人とヒグマが共存するために私たちはどうすればよいのでしょうか。私は、ただ恐れるのではなく、その習性や行動について正しく知るとともに山に入るときのルールやゴミ管理の徹底など、人間側ができる努力が必要だと思います。一方で、現状は目撃情報への依存やリスク周知の限界などが課題となっています。 これらを解決し、より多くの人に素早く知らせるためには、テレビのニュースや速報を活用することが効果的と考えます。テレビなら、スマートフォンやＳＮＳをあまり使わない人にも届き、地域全体で注意するきっかけになります。また、単に「出没した」と伝えるだけでなく、いつ、どこで、どんな状況だったのか、住民や登山者はどう行動すべきかを正確かつ分かりやすく伝えることが重要です。出没場所を示す地図や写真を添えれば、より多くの人が状況を理解しやすくなります。さらに、必要以上に恐怖を煽るのではなく、ヒグマの習性や人里に出てきた理由を発信することで、双方について考えるきっかけになると思います。人の安全を守ることとヒグマの命を守ることは、どちらか一方だけを選ぶ問題ではありません。だからこそ、お互いの生活圏を尊重しながら共存していく方法を考え続けることが大切です。

ヒグマの問題に簡単な答えはありません。それでも私は、港で歩き回っていたあの子グマの姿を忘れることができません。駆除という言葉の向こう側にも命があることを忘れずに、私たちは自然との向き合い方を考えていくべきではないでしょうか。